
召喚っ ~ hopeless endless ~

百

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚つゝ hopeless endless

【Nコード】

N4290R

【作者名】

百

【あらすじ】

今は平気。明日も平気だろう。明後日は？来週は？来年は？・・・それでも、いずれ世界は終わってしまうかもしれない。たった1つの魔法によって・・・ファンタジーなものを書きたくなってしまっただけ書いてしまったお話しです

1 ゲート（前書き）

ファンタジーが書きたくなつて書きました！乱文駄文ではありますが、どうかよろしくおねがいします！

1 ゲート

・ ・ 錯教暦425年 魔道法学院にて新たな魔術が世間へと発表された。

近年発見の無かった新魔法の発表と言うこともありその魔法は多くの人々に期待し、待ち焦がれるものであった。 ・ 期待の新魔術、その名は『召喚術』と名付けられていた。

「はあっ、はあっ、はあっ、 ・ ・ ・」

口から漏れる荒い吐息、不規則に上下に揺れるそのリズムは疲れ切った頭を揺らし、張り詰めた腕からは流れる血潮と共に力が抜けていく。

しかし、発表された『召喚術』は人々が期待していたものとは大きく違っていた。その複雑な術式は難解を極め、異様で奇怪な理論は既存のどの様な魔法にも当てはまらない。その方法は世の理を越え、その方式は大きな波紋を呼んだ。 ・ 賛否両論、肯定否定、誹謗敬服 ・ ・ それらの判断は個々に委ねられるものであったが、宗道部門、特に人間を至上の者と唱える一派からは反対が強く『召喚術』と名付けられた魔術は発表と同時に閉幕の危路へと立たされた。 ・ ・ 発端である理論提唱者が若干20才の若者であったことも原因の1つでもあっただろう。

ガアアアッ

高めであるはずの自身の身長の上に、向かい合う剛毛に覆われた顔が二つに割れる、開かれたアギトには鋭い刃が隣立し、牙と牙の隙間から大きな咆哮がコダマする。

錯教暦433年 8年という長い歳月を掛け『召喚術』はその提唱者自らの手によって確たる魔術として証明をされる。魔法・妖術・奇術、それら全てを越え『召喚術』は既存の教えでは在り得るはずのない、完全なる『命』を世界へと呼び起こすという奇跡の偉業を達成させた。この事実により『召喚術』に対する世間の信憑性は大きく高まり、反論こそ消えないものの確実に認められる理論となる。・また、それと同時に最初の理論提唱者にして初めての有生命召喚術の成功者『ネル・アーヴィング』の名は広く世界へと知られることとなった。

「チッ」

息を吐き体を大きく捻じ曲げる。指の先、手にした刃は地面の上を滑る様にして駆け抜けて、舗装されたレンガの上で微かな火花が巻き上がる。

・天才は唱えた。「人に、魔法など使えはしない。魔力と呼ばれる力が直接的に世界に影響を及ぼすなど絵空事だ。全ての魔術は作られた『門』の閉と開に過ぎず人の力など所詮微々たる物。人の思いが火を生み出すなど無く、人はただ火へと連なる門を開くだけ。・自らで生み出せることなど何も無い、全ては借り物の力に過ぎない」

ガアアアアアアッ

「っ、くっ」

迸る轟音と合わせて腕が走る、繰り出された剣は振り下ろされる丸太の様な腕と噛み合い、あるうことか毛のみに覆われたその腕に大きく弾き返される。

・それは人こそが魔、人こそが力。そう唱え続けていた宗道の教えとは真っ向から反するもので、天才の言葉に非難と糾弾は絶える事は無かった。・しかし、それでも確固たる彼の魔術理論は多くの人を惹き付け、次第にその勢力を伸ばしていくこととなる。

「ゲ」

単純なる力によってのみ押し返され、腕を離れた剣が宙を舞う。クルクルクルと小刻みに回転させながら飛び出した刃は僅かな滞空

時間を伴ってレンガを叩いて地に落ちる。

錯教暦435年 もしくは 救光暦元年 時の王の死去。それに伴い新たな暦が制定される。・しかし、次代の王の選定に伴い問題が生じることとなった。原因不明の病、度重なる事故、突然の死、多くの『偶然』が同時に重なることとなり、その結果、本来なら王位継承権とは最も遠いはずの妾の、それも生まれたばかりの王女が次代の王として認定される。・この不測の結果に異を唱える者は多く『望まれぬ』新女王に対して複数の勢力が立ち上がり、それぞれが正義を名乗り武器を手取る。・黒に最も近い濃い灰色。ドロドロとした王位継承戦・事実上の戦争の始まりだった。

アアアアアア

迸る甲高い咆哮と風の唸りが耳に届く。

「ッ」

崩れかける体を出来る限り垂直に保つ、顔を上げ、瞳を開き、迫り来る腕、その鋭く尖った爪を見つめながら。

「クッ、アアアアッ」

大きく、駆ける

救光暦3年 魔が魔を呼び、凶器が凶器を呼ぶ。度重なる闘争は留まることを知らず、机上の話し合いは少しの進展も見せることは無い。争いに投与される武具や魔術は日増しに殺傷性を高め、濁々とした戦場に流れる血に終わりは見えなかった・・・誰もが疲れ、誰もが恨み・・・そして、誰もが救いを求めていた。

風が、振るつた。走り行く剛力の螺旋は幾数回、振り下ろされる凶撃に素早く体を揺らし凶器の雨の中を掻い潜る。

ギアアアアアッ

「ッ、クッ」

避け切れずに振り回す腕が、薙ぎ払う爪が僅かに触れる・・・ただそれだけ、ほんの僅かなそれだけで溢れる暴力が体中を突き抜けて込み上げる痛みが意識を揺らす。

しかし・・・それでも、倒れない。

ギ、アアアアアア！！！！

「っ」

痺れを切らしたのか荒れ狂う敵から一際大きな咆哮が放たれる。それと同時に・・・いや、そのために咆哮を上げたのかバラバラに振るわされていたはずの豪腕はひとつに重なり、身震いする程の風切音を奏で頭上から振り下ろされる。

救光暦4年 変わらぬ混迷の中、長く消息を絶っていた天才が再び世に現れる。新たな魔術の提唱者、奇跡の偉業の生みの親。天才『ネル・アーヴィング』。しかし、その登場は人々が求め続けていた救いなどとは程遠く、ひどく最悪で、汚れきった舞台による登場だった。

盛大な音と共にレンガが吹き飛ぶ。組み合い振り下ろされた凶腕はその威力を余すところ無く発揮させ地面の上で前後に走る亀裂と大きな歪曲円を作り出させる。

しかし

「ッ」

全ては、背後で起こった出来事。

身を捻り、かわし、凶悪の真横を走り抜けながら

「ッッ」

痛む腕、ソレを懸命に伸ばして自身の剣を掴み取る。重く揺れる刃が地面に触れ、持ち上げる腕が悲鳴に揺れる。

ガアアアア

構え直した剣を掴み、振り返る瞳で『敵』の姿を改めて目に写す。
・それは、人の身長のはあるつかという大きな獣。太く強靱な二本の足で大地へと直立し、吐き気を催しそうな程に膨れ上がった筋肉はびっしりと生え揃った銀毛に覆われ肌の色まで見えはしない。

「・・・っ」

咆哮と共に十字に重ね合う太い腕、まるで巨大な盾を思わせる豪腕を突き出しながら、血を求め、命を求めて獣が走る。

「・・・ハ・・・ア・・・」

向かい来る巨大な圧迫感、死の恐怖。

その恐ろしさを肌で感じながらも冷たく、冷たく、息を吐く。

足の指、その先で地面を掴み取るようなイメージ。下半身に力を込め、持ち上げた剣は止める事無く、高く天頂へと振り上げて・・・弾き返された先程とは逆、今度は、コチラが『上』で、向こうが『下』で。

掲げた剣の、その中でカチカチカチと音が鳴る。

「こ、の・・・！」

グアアアアアア

最天頂に持ち上げたと同時に、掲げ、突き進む敵の動きに合わせてその剣を

「バケモノがああああ!!！」

振り下ろす

救光暦4年・冬 激動の時代を生きた1人の天才が、その身を刃にて貫かれる。・それは雪の降る寒い日、王都の真つ只中で、多くの人に睨まれながら。・事実上の公開処刑。だが、それすらも生ぬるい。事態は既に当事者の命1つ程度でまかなえるほどのものではなく、天才の作り上げた最悪な術法は既に野へと解き放たれた後だった。・全てが遅く、何もかもが手遅れだった。・しかし、それでもかの天才は誹謗に折れる事無く、憎しみの目に揺れることも無く、涙のひとつも流さずに最後の瞬間に言葉を残す。

「全てが、間違いだった。・魔法も、魔術も。・なにも、かも、盛大な考え違いをしていたんだ。・私、達は。・ク、フッフ、ハハハハ。・笑え、笑えよ、子よ。・だが。・だが、それでも、せめて。・」

人の世に幸あれ」

「・・・」

無言で空を見上げ、血塗れた腕を静かに拭き取る。すぐ背後、首から上だけを半分にかち割られたバケモノの姿、その偉容は二度と動く事は無く物言わぬ体は静かに地面で倒れ続ける。

「・・・ふん」

疲労により痺れる腕を揺すりながら視線を動かす。当初の騒動こそ収まってきたものの周囲ではまだ『他の』バケモノと人間との小競り合いが続いており、休まる時間もあまり無い。

「行く……か……！！」

……そう、思ったところで、突如として盛大なサイレンが巻き起こった。

救光暦6年 王位継承も、勢力争いも、全てが無意味と化していた。事態はもはや争うどころの話ではなく、いがみ合う場合でもない。ただ1人、たった1人の天才が放った魔術により世界は急変してしまった。

「……」

鳴り響くサイレン、飛び交う怒号・悲鳴。それら全てを塗りつぶすようにして空が『黒』に覆われていく。蔓延る様な薄暗闇は次第にはつきりとした輪郭を形取り、見上げた視界その全てを喰らい尽くすように、空が、『魔術』によって塗り替えられていく。

『撤退っ！撤退！撤退だー！ー！！』

……誰だろうか・聞き覚えの無い声が拡声器越しに周囲へと響く。……戦闘前に隊長格はいたはずだが、どこへいったのか・

「……」

無言で見上げる空、視界に写ったのは巨大な・巨大としか例え

よ用の無い『魔法陣』。完全に形を作り上げたソレを目にしてバケモノと戦闘をしていた者、傷を抱えずくまっていたもの、倒れた者、寄り添う者、吼える者、その場の全ての人間が我先にと走り出し、振り返ること無く逃走を始める。

「・・・ク・・・」

・・・低く、・・・小さく呟く。

下げた視界に写るのは廃墟と化したかつての町、バケモノの姿。

・・・子供の死体・・・夫婦の死体・・・老人の死体・・・仲間の死体・・・人の死体。

「ク、ソ・・・ッ」

もう一度呟き、唇を噛み締めながら手にした剣を背中の鞘へと仕舞わせ走り出す・・・振り返る勇氣すら湧かずに懸命に無様に、青年は『逃げ出した』。

『ゲート』・・・その魔術はそう呼ばれることとなった。誰も見たことの無い、誰も知る由もない。ただ1人の天才だけが作り放った最悪の『召喚術』。破る方法も見つからず、絶つ手段も分からない。・・・ただただその魔術は消えること無く『進化』を続けた。初めは未知なる草木を、続いて見たことも無い獣を呼び、・・・果てにはバケモノを怪物を悪魔すらも次々とこの世界へと呼び込んだ。

次第に強くなっていくバケモノたちに誰もが争うどころでは無く

なり、神出鬼没なゲートによって豊かな町も一日にして消え去る世が訪れた。

『門』は、その果てには何を呼び出すのか・・・それは誰にも分かんなく、考えることも恐ろしい。

世界は今　　ゆっくりと、確実に

『死』へと向かって歩き出していた

2 走る籠の夜に

いらっしやいませ

暗く、翳った部屋の中、小さなベルの音と共に言葉が響く。響いた言葉はとても低く穏やかで、暗い闇に染み込むながら広がっていた。

ようこそ、おいでくださいました

礼儀正しく整頓された言葉遣いには一点の迷いも無く・・しかし、それゆえに作り慣れた文字の向こう側は見ることも出来ず、又、見る必要も無い。

それで

ここは『店』。客は人として、店はツールとして、互いの意思など想い合う必要も無く、向かい合う瞳に写るのはただの人形。

本日は、どういった、ご用件で

伏せられる顔もかざす手も、向かう先などありもせずここに『他人』など居はしない。

・・・

客は無言で、見えない暗闇の中で少しだけ頬を歪めると、喜びの笑顔と共に言葉を漏らす。

偽る必要も無い、形だけの言葉を

傭兵を、探している

ガタン、ガタン、ガタン

それも、出来るだけ

ガタン、ガタン、ガタン

・・・い、傭兵を

ガタン、ガタン、ガタン、ガタン、ガタン、ガタン、ガタン

・・・ガタン、ガタン、ガタン、ガタン・・・。

ガタンッ

「ツッ！」

急激に走る熱さと痛みにより閉じていた瞳が大きく開く。

「ツ、ウウ・ッ」

蘇る視界に写るのは鼻先20センチほど、至近距離で広がる木の板、しつかりと見もしなくても所々に走る傷と汚れによってその年季の入りようが一目で分かる程だった。

救光暦15年

ガタン　　ガタン　　ガタン　　ガタン　　ガタン

「ツ、ウウ、ウ・・・」

熱く擦れる様な感触に鼻まで手を伸ばすと鋭い痛みと共に、若干の生臭い鉄の匂いが感じられた。

「少し、打った」

ゆっくりと漏れた言葉は目の前の天板に跳ね返され、収納家具を思わせるほどの狭く窮屈なスペース内に小さく響き渡る。右腕を少しでも伸ばせば冷たい壁へと当たり、左腕を伸ばせば肘から少し先で『下』の感触が消え宙ぶらりに空間へと投げ出される。

「独房の方が・・・マシ、かもな」

右手を壁に当て反動を付けて体を押し出す。窮屈なスペースを潜り抜けた体は、若干の滞空時間を得て、軽い衝撃と共に『床』へと静かに降り立った。

『ぐおー、ぐおおおー』 『くー、しゅるる・・・』 『ガー、がが
がー』
「・・・・・・・・」

隔離された部屋の中、音源の逃げる場所も無く同乗者の音が分厚い壁に跳ね返り響き渡る。・・・口元からは溜息がこぼれ、僅かに残っていた眠気は尻尾を巻いて逃げ出していった。

「静かな分、独房の方が断然マシだな・・・」

1人、そうつぶやくと閉め切っていた戸を開き中を通る。

「・・・・・・・・」

扉を抜けた先で見えるのは掲げられた『3』の文字プレート。背後からは先程開けた戸と壁とが噛み合う甲高い金属の音が響きいきの音を分断させる。・・・長い通路の中、聞こえてきていた音はそれだけでなくなり、他に聞こえて来るものはひっきりなしに揺れる小さな軋みの音と低い駆動音だけとなった。

「・・・・・・・・ふう」

なんとか、『見える』と称される程度の光度しかない非常灯は通路全体を映し出すには事足りず、断続的に残っている暗闇とひたすら『3』だけのプレートが掲げられた空間は見ているだけで妙な気分を沸き起こさせる。・・・まるで・・・これが現実ではないかの様な妙な酔迷感が。

「・・・・・・・・八・・・」

バカげた考えを振り払い口元だけで小さく笑う。足りない現実感を補うように掲げた腕は軽く裾の埃を払い、通路の先へと向けて足はゆっくりと歩き出す。

大陸間、それも主だった都市同士の間にはしかもまだ開通されていない運搬用高速装甲車両。別名『ウイール』。世界中に呼び出された数多の獣達に阻害されない安全な旅を・・・という名目で製造された新式の魔道交通機関ではあるが・・・良くも悪くも本当に真の意味で安全性しか考慮されておらず。乗り心地は最悪、中身は狭い、料金もバカにならないの三重苦を兼ね備えており。その上、安全性向上の為、装甲板同士を張り巡らされたその外観は非常に汚く、別名である『ウイール』どころか見た目のフォルムからほとんど『黒ムカデ』としか呼ばれていない・・・ある意味とても不運な扱いを受けている車両だった。

「・・・」

窓が無く光も少ない暗がりの中を歩く。通路の両脇には等間隔でプレートが掲げられ、それぞれのプレートの下には必ず牢屋並みの狭さの部屋があり、その中にはまた必ず壁付けの窮屈な3段ベッドが2つずつ用意されている。

「・・・夜か？」

月明かりも、日の光も見えはしないが通行者はほとんどいなかった。それだけ深夜なのかも知れないが相変わらずの妙な不確かさだ

けが判断を鈍らせる。

「……」

目的も当てもないまま尚も歩いていく。・・するとやがて『3』のプレートの数が少なくなり、通路は少しだけ広くなる。

3等車両の最後尾、2等車両の最前部、二台の車両のジョイント部は比較的広めに造られ、小さな窓と簡素な休憩室が備えられていた。

「……やっぱり、夜か」

眩き、小さな窓から空を見上げる。車両の皮膚に当たる装甲板と装甲板、その合間から見える夜空には赤々と輝く濁った月が見取れる。・・星は見え、夜は翳る。見下げた大地は荒廃としており、所々に見える緑は暗い夜のせいかな濃厚で毒々しい色合いとして目に映った。

世界は滅ぼうとしている

「……」

そう唱えたのは誰だったか。ふと耳にした噂話か、たまたま見た本のお話しか……。それでもその何かは言っていた。・・荒らされ、荒廃とした世界は、確実に滅ぼうとしていると。

「……汚いな……」

その結果が、もしくははその過程が・・・この、汚い景色だと・・・そう、決定付ける・・・確かな・・・。

「くんばんは」

「！」

急に声が聞こえ振り返る。慣れた習慣からか振り向いた瞬間、腕は背中へと伸び・・・しかし、そこにいつもの『物』がないことを思い出し、手を止めた。

「・・・スミマセン・・・おどろかして、しまいましたか？」

「・・・いや、別に・・・」

空中で止まっていた腕を静かに落とす。見ると、振り返った先、二等車両側の椅子に『人』が腰掛けてるのが目に映った。・・・男でも、女でもなく、『人』。旧暦の魔法使いを思わせるような黒いベールと黒いマントで全身を覆い、光度の少ない非常灯に照らし出されたその姿はアンバランスで、気分が悪い。

「つつい、私としたことがスミマセン。こんな時間に、誰かに会えるなんて、とても、うれしくて」

「・・・別に・・・気にしてない」

礼儀正しく流れる言葉に声を濁す。・・・声質から相手の判別を下そうと試みたが、やはり寝起きであるためか曖昧な感覚が判断を緩めさせる。

「私、夜型でして、こんな時間、誰かと会えるなんて、ほとんどな

いもので・・・」

ボールの下、クツクツと漏れる笑い声が妙に耳へと残る。

「実は・・・私、占いを営みとしていまして・・・どうですか？せめての記念に」一度・・・もちろん、料金などいただきません、よ？」

言い、まるで見せ付けるかのように、『占い師』の手によりマントの下から束ねられたカードが取り出される。

・・・妙な納得感が沸いた。この奇妙な出で立ちも言葉遣いも演出として、占い師『らしさ』をかもし出す為の小道具としてと考えれば、・・・おそらく・・・おそらく、筋が通る・・・。

「占い、か・・・」

少しだけ考える。普段なら占いや運勢といったものは全く気にしないはずであるが、不思議と今だけは興味がそそられる。

「折角だし・・・頼もうか」

そう答える・・・

「・・・クツクツ・・・はい・・・」

きつと、嬉しいのだろう、見えないボールの下がわずかに揺らぎ、静止していた占い師の腕が水を得た魚のように動き出す。

右に、左に、上へ、下へ、束ねられたカードが複雑に交じり合いながら揺れ動く。

「・・・」

その様を見て僅かに笑いが込み上げた。・誰かを占う、何かを占うと言っておきながら、結局占われる本人はそのカードに触れることも無いのに、何故その結果がそのものの運命だと言い切れるのか。占い師が相手の事を考えていたからそれでいいのか・ならば占いの最中に夕食の献立を考えればその結果は肉や野菜の運命ではないのか?・そう考え、自身の考えのバカらしさに笑っていると、占い師の手が止まる。

「出ました、よ」

占い師の手の上、再び整然と整えられたカードが裏側を見せつけながら今か今かと出番を待っていた。

「1番目」

勿体ぶりつつ振られる指先、束の一番上からカードを引き抜くと表へと返して膝へと置く。

見えたカード、それは何ひとつ飾るものも無い、地面だけの絵が書かれたものだった。

「・・・なんだ、これ」

思わず、声が出る。見えたカードには他に数字なども何も無く、見栄えする絵も何も不思議な記号も有りはしない、ただの、地面だけ。・別段占いに詳しいわけではなかったが、こういった占いは絵柄の演出などにもこだわるものではないのか・いや演出にこだわらないのならそもそもその格好はなんなのか・不確かな疑問

が駆け抜け、それでいて答えは出ない。

「2番目」

湧き上がった心の中だけの疑問、それに占い師が答えるはずも無く次なるカードがめくられ、膝の上へと静かに置かれる。

・・今度は何のつもりなのか、何も無い黒地の絵柄の中、水色の塊が生々しい質感と共に描かれていた。

「3番目」

声と共にカードがめくられ、膝の上に並べられる。

「・・・」

目に映ったカードは、二番目に見たカードと全く同じ絵柄のもの。見た目も一緒、絵柄しかないためにおそらく中身も同一。

「・・・」

・・カードの束の中、同じカードがいくつもあって意味があるのだろうか・・・そう、感じられた。

「4番目」

カードがめくれ置かれる。

「・・・」

描かれていたのはまた同じもの。・何度も目にして分かってる、おそらく、これは『水』なのだろう。・結局、それ以上分かりはしないが。

「5番目」

カードがめくられる。また同じ。かと思いきや並べられたカードには別の絵柄が書かれている。黒い雲とそこから落ちる一筋の黄色い光。。。

「・・・雷？」

「・・・6番目」

ふと漏れた言葉に占い師が答えることは無くカードがめくられ、膝へと置かれる。

「・・・」

6番目、新たなカード。・その絵柄と言えば「何の手抜きだ？」と疑いたくなるほどのものだった。カードの中、絵柄の枠こそあるものの中身は完全に何もなく、ただの白い無地だけが広がっている。

「・・・ふむ・・・」

占い師は再びカードをめくる事無く抜き出された6枚のカードを並べ息を吐いた。

「・・・つまり『水に気を付ける』か？」

占いへの興味も段々と薄れ、どうでもいい気分で結果だけを促す。その言葉、黙っていない客からの言葉に占い師はベールの下で少しだけ笑みを零す。

「・・・いえ、原初に、砂があります」

そう言って膝の上、1番目のカードを指差す。

「砂に水、湿り、土へと」

指先は滑り、2番目から3番目へと

「土に水、濡れて、泥へと」

指先は滑り、3番目から4番目へと

「泥に水、腐り、淀んで」

指先は滑り、4番目から5番目へと

「腐りし、泥へと、降る、雷」

指先は操り、1番目から5番目のカードが全て伏せられる。

「・・・6番目は、ブランク。・・・まだ、決まってない、ようですね。」

クツクツクツと占い師の口元、ベールに隠されたその奥から笑いがこぼれる。

「けど・・・『黒』はいけません、黒を、掴ませる、わけには、いけません・・・なるべく、『白』を、『白』を、掴んで、ください、ね」
「・・・う」

占い師の肩が揺れ、クツクツとくぐもった声が流れていく。

この時・・・この時に至って初めてこの占い師が薄気味悪いと思えた。

「・・・何を言ってる」

緊張感を高め、一步距離を取る。体は敵対姿勢を取り、臨戦態勢へと持ち込むが・・・しかし心の方がまるで感度が鈍ったかの様に奮い立たない。

「・・・いえいえ、ご冗談、です・・・すみません・・・」

こちらの敵対姿勢を感じ取ったのか占い師は柔和な態度で頭を下げさせる。ただ、それだけ、頭を下げただけのことなのに先程まで感じていた危機感が嘘の様に解けて行き緊張が消えて行った。

少しだけ、気分の悪さが込み上げる。

「・・・そうそう、そうでした」

全てのカードを再び仕舞い込むと占い師は手を叩き、さも今思い出したといった風に声を上げ指を差す。

「その、座椅子の上・・・誰かの、落とすもの、ですかね・・・何かあるんです、・・・心当たりは、ありませんか？」

「・・・椅子の上・・・？」

振り返り、目を張る。すると、そこには確かに薄暗闇に紛れて見落としていたのか、『見落としようも無い程』の大きさの何かが置いてあった。

「・・・ん？」

自身の考えの不明瞭さに危機感が再び顔を出す。

「おそらく、大切なもの、じゃ、ないでしょうか？落とした人も・・・かわいそうに、探して、いるかも、知れません」

「・・・」

確かに、それは大切な物なのかも知れなかった。鞆程度の大きさで、嚴重に鍵が掛けられて

「どれほど・・・大切なものでしょう。手に取って、届けて頂ければ・・・それは、どんな、ものでしょう」

「・・・こ、れ・・・」

それは、大きな、一冊の、『本』だった。

3 走る籠の夜に？

かざした手、その大きさに比べ縦に4倍、横に3倍。

『本』と思えたものはその名ばかりで横合いから見つめても、厚く光沢のあるカバーに覆われページの1つすら見えはしない。上下左右、斜め十字に封をするように黒い鎖が張り巡らされ端部には鍵穴の開いた錠前が、鈍く光を放つ。

これは・・・本当に『本』なのか・・・。

そう思えるほどにその様は重圧に満ちている。高級品には違いなのか黒いカバーには所々金の装飾が施され、厚い錠には名前も知らない特大の宝玉が丸々と埋め込まれている。

「・・・」

・・・しかし、それでもこれは『本』だった。たとえ表紙が見えなくても、たとえページを捲れなくても、これが『本』であることは間違いなかった。・・・そう思えた。

「・・・ツッ」

伸ばした左腕、その指の先から突如痛みが沸き起こる。

音も無く・・・触れるモノもなく・・・生み出された痛みは赤き傷と

なり流れ出す雫は玉となって。・かざした先、『本』の上へと。

ポタリと、落ちた。

「あっ」

「・・・ん？」

・声が聞こえ振り向く。二等車両側の通路、休憩室の一步手前のところに人影が立ち尽くす。・人影とは言ってもその姿は自身の姿に比べひどく小柄で、薄暗闇の中、そこだけは光るような白い衣服に、黒い帽子を被り立ち尽くす。

「・・・あ、の・・・その・・・」

小柄な影、その目深にかぶった帽子の内側で動いたか動かないかも分からなくらい小さく口が開き・そして閉ざされる。僅かに掲げられた指先は持ち上がる途中で目標を失ったように立ち止まり、猟師帽の様な厚手の帽子のつばに隠れ、こっそりと覗き込む瞳は忙しなく辺りを駆ける、

自身と、自身の指先、そこにある『置物』へと向かって。

「・・・ああ」

得心が行き、納得して息が漏れる。

息の原因は安堵・・・というよりも厄介事に関わらなくて済んだという安息。・・・丁度いいところ、この『よく分かりもしない』忘れ物を丁度見つけたところでどうしようか迷っていたところだった。

「コレ、お前のか？」

そう言い視線の先、座椅子の上に置かれた置物へと指を差す。

「っ、っ、っ、っ」

・・・変化は劇的だった。黒い布に包まれた頭は何度も縦に振られ、一振りすることに漏れる小さな吐息がそれだけで答えを示しているようにも思われる。

「・・・あっそ」

声を出してもう一度目の前のモノを見る。それは、大きな長方形型の黒い何か。取っ手の様なものは特に見えず鎖に巻かれたその姿は異様に物々しい。所々に張り巡らされた装飾は豪華そのもので、鎖の端に埋め込まれた宝玉は申し分も無い程に大きく美しい・・・そう、これは、疑う必要すら無い程に『臭い』品物だった。

「・・・ふん」

確かかどうかもわからない利益と沸々と感じる嫌な予感。・・・このふたつを天秤に掛けてしまえば答えは1つ、・・・ネコをも殺す好奇心なんて興味もない。

「別に、・・・盗ったりなんかしないさ」

腕を伸ばし置物を取ろうとして・・・一瞬、躊躇する。・・・置物に触れる直前、そこで伸ばした指先は止まり、意味も分からず体が強張った。

「・・・？」

「・・・いや・・・なんでもない」

無言で傾けてくる視線に少しだけ首を振ると止まっていた腕を一歩押し出し『置物』を掴み取る。

・・・。。。

「・・・」

・・・別段、変化は無い。特に変わったところも無く、感じたことと言えば少し重いな程度の感想のみだった。

・・・まるで、脱力したような徒労感。見た目が怪しいからといって別に何かが起こるわけでもない。・・・そもそもこんな場所に置いて行かれた忘れ物、触っただけでいちいち何か起こるようだったら

とつくの昔にこんな所に有りはしないだろう。

「ホラ」

「っ、っ」

手に取った忘れ物を乱雑に差し出すと、目の前の小柄な人間は再び上下に激しく首を振り、慎重に慎重を重ねた様な動作でゆっくりとソレを掴み取る。

「・・・ハ、ア」

小柄な影は『忘れ物』を手に取ると抱きしめるように両腕を組み合わせ静かに息を吐く。

「よかった」

帽子の下、浮かび上がる笑顔と安堵の吐息。

・・・特に取るうなどとはまるで思っていなかったが目の前でこつも大切そうに、こつも嬉しそうに安堵されると小さな罪悪感の様なものが沸いてくる。

「・・・」

妙に居心地悪く、手持ち無沙汰な左腕が上がり頬を掻く。

「・・・」

小さな、痛みが走る。ピリリとした細い痛みは指先から。頬から離れて見てみると左手の中指、その先端から中腹にかけてを直線に走る赤い傷跡が目に入る。

(こんな傷・・・あつたか・・・?)

疑問に思い、指を注視する。・・・痛みこそ走ったものの傷自体はほぼ治りかけており改めて触れてみても特別に痛さは感じない。・・・それはそれで、いいのだが・・・この傷が何で、いつ傷付いたのか。・・・それが全く思い出せない。

「・・・」

気分の悪さが溢れ背後を振り返りたい、周りを確かめたい、そんな不安定な願望が蠢き動いた。・・・事実、振り向いてたが・・・自身の背、その後ろには何も無く、非常灯の下で、ただ『誰も座っていない』座椅子がいくつがあるのみだった。

・・・形容できない、嫌な気持ちが増していく。

「・・・?・・・どうかしましたか?」

「・・・別に」

掛かる声に素っ気無く答え、目の前の人間へと意識を戻す。忘れ物を抱き締めたその姿は気のせいか先程より覇気があり、語り掛ける言葉も少しだけ強くなったように感じられる。

・・・別段、それがどうということもないのだが。

「・・・忘れ物はあったんだろ？さっさと帰れよ」

一拍の間を置き、話しを区切るために声を上げる。切り取られた窓から外を覗いてみれば相変わらずの暗闇が広がり。正確な時間こそ解りはしないがかなり遅い時間だということだけは予想が付いた。

「・・・あつ、はい、ありがとうございました」

最後に一度、もう一度だけ今度は深く頭を下げる。

「・・・ご親切に、ども」

過剰な礼儀正しさに皮肉を込めた言葉がついと漏れる、・・・しかしその言葉の意味に気付きもしないのか小柄な影はもう一度「ありがとうございました」と声を上げると即座に振り返り歩き始める。

・・・向かう先は二等車両、自身が戻るべき方向とは真逆の方向だった。

「・・・ふう」

溜息が漏れる。

・・・例えてしまえば『やれやれ』といった気分。

「そもそも、なんでオレこんなところに来たんだかな」

自嘲気味に小さく笑うとこちらも振り返り、二等車両へと向かって歩き始める。

「・・・思い起こしてみれば変な夜。・・・しかし、それもこれで終わりです。・・・残る課題といえば・・・」

「・・・いびきの嵐に帰るとするか」

「・・・あの暴音の中、どうやって再び眠るかということだけだった。

頭の中、イロイロな睡眠方法を考える。

軽くストレッチでもするか、何か眠気を誘うものでも飲むとするか・・・もしくはいつそのこと、もう二度といびきが掛けないように元凶共を黙らせるか。

「・・・ふう」

いずれの方法を取ろうとも残りは部屋に戻って休むだけ、それだけで、今夜は終わり。

・・・その、

ッ

・はずだった。

「・・・ん？」

ふと目にした窓の外、赤く古ぼけた月の光。
それが一瞬だけ
『何か』によって翳られる。

「・・・なん・・・っ！」

一瞬の空白が満ち、その直後

ガガ ガガガガッ

「な、！？」

装甲車両、その全体が大きく揺らぎ、振動が足元を突き抜ける。

ガ ガガガ

「きゃ、わっ」

声が聞こえ視線を送る、写った視界の先で先程まで話しをしていた相手が盛大に床板に投げ出され体を落とす。

「っ、くっ！なんだ、これ、障害物とか、そんなレベルじゃ、ないぞ」

懸命に足元に力を送り、揺れに備える。

だが、三度

ガガガガンツッ

「っ！！」

最後に特大の衝撃音と揺れが体を襲い、遂に足は折れ床板へと投げ出される。

ガタン

ガタン

ガタン

ガタン

「・・・くっ、・・・」

幾秒、そうしていたか。投げ出された格好のまま頭を守り、閉じていた瞼をゆっくりと開いていく。目に映ってきたのは見事なまでに倒された座椅子達とやや傾いた様にも見える切り取られた窓。

ガタン　　ガタン　　ガタン　　ガタン

「ツ・・・一体、何が」

数度頭を振り、ゆっくりと立ち上がる。

ひどい揺れはもう収まった様で、高くなった視界の中、慎重に行動しもう一度窓の外を見る。

ガタン　　ガタン　　ガタン　　ガタン

「・・・」

先程の衝撃で停まってしまったものと思ったが窓から見える景色は留まることなく後ろへと流れ続けている、足元から伝わってきている振動も通常時のソレとほぼ変わりがなく、・・・違いがあるとすれば・・・

「・・・なんだ」

先程と比べ、その進行スピードが遙かに『遅く』なったということだけだった。

「・・・う、うっ、う・・・」

「っ」

声のする方を振り向く、地面に投げ出された体勢のまま頭を、・・・正確には帽子の上から頭を擦りながら小柄な影がゆっくりと動き出す。

「っっ・・・う、一体、なんですか」

「・・・」

頭に手を置き、片腕は忘れ物を抱き締めながら・・・それでよく立とうと思えるモノだと場違いに感心をする。・・・してしまっ、が、さすがに感心して見ているだけにもいかず、傍へと近づき手を差し伸べる。

「・・・大丈夫か？」

「・・・え、あ、はい、まあ、・・・なんと、か？」

返ってきた答えは大丈夫か大丈夫でないのか微妙な反応。しかし見たところ特に怪我をした形跡も無く、抱き締めた忘れ物も無傷の状態で腕の中に在り続けていた。

「・・・つたく、一体なに・・・」

オ オン

「・・・」

・・・僅かに、引っ掛る。

それは匂い、音・・・小さな違い。

首を回し、暗闇を見つめる。・・・見つめた先は二等車両側、断続的に点々と続いていた非常灯は所々碎け落ち、つい先程よりも濃厚な暗闇が通路の奥へと向けて広がっている。

「・・・?・・・どうかしました?」

手を掴み繋いだまま眼下から声上がる。

小柄な影と自身との身長差は大きく、接近してしまえば自身の姿に完全に隠れてしまうほどで。

「・・・」

下から聞こえてくる声に答えはせずに、ひたすらに暗闇を見つめ・睨み付ける。

オ オオン

例えるならそう、僅かな誤差感。

それは匂いでもあり、音でもあり、感じ取れるような重苦しい空気。

『普通』であれば味わうことも無く、それでいて

オ オオオンッ

「っ、っ、っ」

自身がいつも、日常的に感じている、『獣』の空気。

暗闇の中をヒタヒタと、ゆっくりと歩み寄る黒い影、僅かな光源に照らし出されたその体は暗くざわめき、鈍く濁り

オオ オオオ オオオオン

黒に浮かび上がるは赤の瞳、野犬の様な外観で口元からは刃を思わせるような鋭い犬歯が覗き、顔と『背中から生えた』口からは絶える事無くくぐもった唸りが漏れる。

・・・異界の獣。世界へとはびこる滅びの元凶達。

「あ、あああ、あ・・・」

小柄な影から引き攀った声が漏れ、その体が大きく揺れる。

「・・・チッ」

小さく舌打ちが漏れる。

「・・・おい・・・」

声を出し下を向く、繋がった手は改めて強く握り直し、揺れる体を、震え出そうとする小柄の体を繋ぎ止める。

「・・・あ、あ・・・」

声に反応し、ゆっくりと上がる顔。

浮かび上がる視線をしっかりと見つめ、目を反らす事無く。

オオ オオオオ

魔獣の口から叫びが漏れる、その音は耳障りなほど甲高く、高く、高く

「・・・走るぞっ！」

口にしたと同時に、引き込むように腕を、体ごと巻き込んで大きく後ろへと

ガアアアアアッ

叫びが漏れ、牙が光り、爪が
駆け抜けた床板を食い千切り、破片が、宙を舞った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4290r/>

召喚っ ~hopeless endless~

2011年10月8日13時51分発行